サイクルツーリズムシンポジウム 2018

また来たい。思う 地域まるごとのおもてなし

今、注目の"自転車"は地域活性化の起爆剤になり得るか? 決め手は「よう来たなあ」









サイクルツーリズムシンポジウム 2018

また来たいと思う 地域まるごとのおもてなし

自転車は小回りがきき、ほどよいスピードで、色彩や音やにおいなど土地の空気をダイレクトに感じられるため、地域を深く味わうには 最適の乗り物です。そんな自転車旅で「また来たい」と思わせるのは、自然や風景の魅力もさりながら、その土地の人がサイクリスト をどのように受け入れているかということに左右されます。訪れたサイクリストが「いいね!」と感じ、他の人にも「よかったよ!」と 伝えてくれる地域づくりはどうすれば実現できるのでしょうか。サイクルツーリズムを通したまちづくりや、地域住民とサイクリストが ともに楽しめるイベントの仕掛け方などについて、各地の取り組みを学び、ともに考えましょう。



2018年 2月 18日 (日) 午後 1:00 ~ 4:30 (予定)



滋賀県立男女共同参画センター (G-NET しが) 視聴覚室

滋賀県近江八幡市鷹飼町80-4 JR・近江鉄道近江八幡駅から 徒歩約8分



内容

【基調講演】

自転車がうみだす都市農村交流

~自転車の聖地プロジェクトが 町とサイクリストにもたらしたもの~

講師:ブラッキー 中島 隆章 さん

【事例紹介】~5名

※発表者を募集いたします。詳しくは「申込み」欄をご覧ください。

【ディスカッション】

パネリスト:

ブラッキー 中島 降章 さん

田口 真太郎 さん

(まちづくり会社まっせ 事業マネージャー)

藤本 芳一 (輪の国びわ湖推進協議会 会長)

コーディネーター:

佐々木 和之(輪の国びわ湖推進協議会 事務局長) ※シンポジウム終了後、17:00 より会場近くにて懇親会 (参加費3,500円)を行います。



参加費 資料代 500 円



輪の国びわ湖推進協議会、NPO法人五環生活、 歴史街道推進協議会



申込み 2月13日(火)までに輪の国びわ湖ウェブサイト

(https://www.biwako1.jp) の申込画面、または輪の国びわ湖推 進協議会 (FAX: 050-3730-5843) まで、参加人数、参加者全 員のお名前、代表者のご住所、所属、電話番号、シンポジウム、 **懇親会それぞれの参加・不参加**をご記入の上、お申し込みください。

※ご自身のサイクルツーリズムに関する活動内容についてご報告いただ く「事例紹介」で発表で希望の方は、2月9日(金)までに内容 (300 字程度) とご連絡先をお知らせください。多数お申し出の場合は、 ご希望にそえないことがございますので、ご了承ください。



問合せ 輪の国びわ湖推進協議会

E-mail: info@biwako1.jp FAX: 050-3730-5843



ブラッキー

「一人でも多くの子どもに自転車 の楽しみを」を合い言葉に全国 のサイクリストの有志が集まっ たグループ「ウィーラースクー ルジャパン」の代表。自転車を きっかけに京都の美山を好きに

家族と共に古民家に移住。「自転車の聖地プロジェ クト」をたちあげ、自転車を利用した地域活性化に取り組 む。グラフィックデザインオフィスフェイムイマジネー ション代表。京都生まれ。



田口 真太郎 さん

〈たぐち しんたろう〉

1987 年茨城県日立市生まれ。滋賀 県立大学大学院にて環境科学修士を 取得。近江八幡市の地域おこし協力 隊員を経て、2013年よりまちづく り会社(株)まっせのマネージャー として活動。

地域資源(自然・歴史・文化)の保全と活用をテーマに、市民、 企業、行政、大学など異なる立場の人たちと連携した、調 査や分析を通じた新しいまちづくり活動に取り組む。



藤本 芳

〈ふじもと よしかず〉

輪の国びわ湖推進協議会 会長 自転車ライフプロジェクト 代表 自転車マップづくりを中心に、IT 技 術、デザインを組み合わせて、自転 車の良さを伝えるための取り組みを 行っている。これまでに日本全都道

府県と世界 49 ヵ国を自転車で走る。著書に『ちずたび びわ湖一周自転車 BOOK』、『ちずたび 京都と出会う自転 車 BOOK 市内版』等(以上共著、西日本出版社)



佐々木 和之

〈ささき かずゆき〉

輪の国びわ湖推進協議会 事務局長 水色舎(すいしょくしゃ) 代表 九州工業大学大学院工学研究科博士 後期課程単位取得退学後、川づくり・ まちづくりコンサルタント水色舎起 業。輪の国びわ湖推進協議会の設立

業務から担当し、設立時から事務局長。専門は景観工学。 折り畳み自転車を鉄道と組み合わせ仕事の足として用いて いる。